

『バイラルキラーズ』

作・澤田金太

【登場人物表】

半沢（35）・・・派遣殺し屋の班長
寺門（54）・・・その同僚
三田村（45）・・・その同僚
外山（28）・・・その同僚
田中（23）・・・その研修中の新人
室伏（22）・・・派遣殺し屋の別班班長
諏訪（73）・・・その同僚
リン（24）・・・派遣殺し屋のエリア担当
末井（60）・・・死体回収業者
浜野（17）・・・その同僚
甲斐（29）・・・自転車デリバリー配達員
山形（30）・・・その同僚
宇川（26）・・・辞めたコンビニ店員
浜口千波（25）・・・三年前に自殺した女

○T…明日か明後日の未来

(以下、指定なければ全て夜)

○トランクルーム

ロッカーの鍵を開ける半沢(35)。

中には使い古したトートバッグや

手袋、ロープ、レインコート等が入っている。

半沢はカラーラベルで他と区別された
自分用のトートバッグを取り出すと、
スマホを見て、

半沢「四件か」

それから何個か置かれた紙箱のうち、
〈半沢〉と書かれた箱から四つの鍵が
付いた鍵束を取り出すと、数を確認。

半沢「一、二、三、四…オッケー」

半沢は鍵をトートバッグにしまうと、
ロッカーを閉める。

○ネット生放送番組

大手ネット掲示板の創設者、金髪の

若手思想家、人気起業家の三人の鼎談
番組。

掲示板創設者「僕は良いことだと思います
けどねえ」

起業家「ヒューマイ？」

掲示板創設者「そう、ヒューマンマイク」

起業家「えー、なんか気持ち悪くない？」

掲示板創設者「でもネットってそういうもの
でしょ？」

思想家「オルトライト系のブロガーなんかも

よくそう言いますね」

起業家「ネトウヨになってしまった」

○テレビの報道番組

傷害事件のニュースをアナウンサーが
伝えている。

画面のテロップは「出会い系アプリで
トラブルか」

アナウンサー「昨夜夜十時ごろ、板橋区の
路上で会社員の女性が刃物を持った男に

襲われ、腕に軽症を負いました。男は駆けつけた警察官に現行犯逮捕されました。警察の調べに対し、男は、スマートフォンアプリのヒューマンマイクで個人情報を拡散され腹が立ち、脅してやろうと思つた、刺すつもりはなかった、と容疑を認めています」

○ラジオ局のブース

夜の帯番組の時事問題解説コーナーのオンエア中。

マイクに向かっていているのはラッパのパーソナリティ、女性アシスタント、情報科学の専門家の三人。

パーソナリティ「僕はヒューマンマイクが出会い系アプリっていうのは違和感があつて、うーん、なんだろう、そういう使い方も確かにできるんだろうけど。島本さんこれ具体的にはどういった仕組みのアプリなのか改めてお伺いしたいんですが」

○渋谷の雑踏

性別も人種も服装も様々な人々が行き交っている。

専門家の声「そうですね、ヒューマンマイク
：：まあ一般的にはヒューマイともよく
呼ばれますが、基本的にはファイル共有
アプリです」

パーソナリティの声「ファイル共有アプリ。
ウイニーみたいなものですかね」

専門家の声「基本的には同じような機能
：：：理念かな。不特定多数の端末とピア
トウピアで直接ファイルのやりとりを行う、
そういったアプリだと考えて頂いて結構
です」

道端に座り込んでスマホを見ている男。
そのスマホ画面に次々とヒューマン
マイクからの画像ファイル受信通知が
入る。

そのファイル名は「パパ活中！」、
「拡散してください、幼い命が……」

「お散歩しながら高収入！」など。

○ YOUTUBE の動画

セミナー形式の動画。スーツを着た茶髪と黒縁メガネのユーチューバー・ピッカリンがスマホをかざして弁舌を振るっている。

ピッカリン「お金のない人も、学校に行けなかった人もイジメを受けている人も、ヒューマイさえあれば誰もが世界を変える情報生産者になることができます」

○ 繁華街近くの公園

甲斐（29）がベンチに座ってその動画をスマホで見ている。

ベンチの傍らにはライトが点灯したままのロードバイクタイプの自転車と、「USER NEEDS」のロゴが入った配達用の大きなリュックが置かれていて、そのロゴ脇には赤い

ピースマークのバッジが付いている。ピッカリンの声「私はこれをノマドデモクラシーと呼んでいます。ノマドデモクラシーについては私のメルマガにも詳細を書きました。是非メルマガ登録をして下さい。ノマドデモクラシーと一緒に世界を――」

○電車の車内（移動中）

終電で混雑している。ドアの近くに立ってスマホをいじっている女子高生の臀部に、背後に立っている痴漢男がそつと手を伸ばす。

専門家の声「ヒューマンマイクの場合は

基本的には Bluetooth を利用してファイルの送受信を行う仕組みでして、まず送信の際はアプリの送信リストに送りたいファイルを登録しておきます。そうしますとアプリが自動的に付近のヒューマンマイク利用者を捕捉しまして、送信リスト内のファイルを送信すると」

ディスプレイ側のカメラを使い、肩越しにこっそり痴漢男を写真に撮る女子高校生。

彼女はその画像に「痴漢、助けて」のファイル名を付けると、ヒューマンマイクの送信リストに入れる。

専門家の声「逆にファイルを受信する場合は、もう、そのまま」

× × ×

別車両――

列車の隣の車両に座ってスマホゲームをしていたヤンキー風の若者が、ヒューマンマイクから女子高生の送った画像の受信通知を受け取る。

パーソナリティの声「初期状態では受信がオンになっているので、アプリを入れて、そのまま何もしないでも――」

専門家の声「勝手に入ってくる」

○テレビの情報バラエティ番組

ニュース解説者が大モニターを使って
ヒューマンマイクの解説をしている。
ニュース解説者「このアプリの問題点の一つ
はアプリのインストールと同時にメールの
連絡先やチャットアプリの友達リストに
ヒューマンマイクをダウンロードするよう
促す脅迫的な文章を勝手に送りつける事
です」

客席の「えー」という声

ニュース解説者「ヒューマンマイクがバイラ
ルアプリと言われる所以ですね」

真面目くさった表情でウンウンと頷く
スタジオの芸能人たち。

○ギスギス動画の映像

動画配信サイト〈ギスギス動画〉で
自室からトーク配信中の生配信主・
汚物マン。

視聴者のコメントを読んで、

汚物マン「何がバイラルだよなあ。お前らが

バイラルじゃんなあ。ヒューマイは革命ですよ。モグラさんありがとう」

○テレビの情報バラエティ番組

モニターに映った図を指して解説しているニュース解説者。

その図は「ヒューマンマイク」へ不特定多数の利用者」へ「ダークウェブ」

「反社会組織？」の項が矢印で結ばれたもので、ヒューマンマイクを介して不特定多数の利用者が拡散した情報が「反社会組織？」に集まり、「ダークウェブ」に流れる図式になっている。

ニュース解説者「ヒューマンマイクを悪用して仮想通貨で個人情報を買収する闇サイト、所謂ダークウェブサイトの存在も囁かれている事から、警察はヒューマンマイクをダウンロードしないよう呼びかけ、また制作者とされるモグラを名乗る人物に関する情報提供を求めています」

○電車の車内（移動中）

ヤンキー風の男がスマホを見ながら、乗客をかき分けて車両を移動している。

アシスタントの声「直接やりとりを行うんですよね？　自分の個人情報が他の利用者に漏れる危険はないんですか？」

パーソナリティの声「それ気になりますよね」

専門家の声「いやいやいや、匿名性は強固に保たれていまして、ただまあ仕組み上、スパイウェアですとか、ランサムウェアですとか、そういった好ましくないファイルをそうと知らずにいつの間にか受け取ってしまう可能性はあります。そういった危険は非常にありますね」

痴漢男を発見するヤンキー風の男。

ヤンキー風の男「（近づいて）おっさん」

振り返った痴漢男の顔面を、ヤンキー風の男はぶん殴る。

○ P C 画面

絶え間ないタイプ音。

痴漢男が一軒家のガラス戸の向こう、居間に立ってパジャマ姿で歯を磨いているのを、家の向かいからスマホで撮影した画像が画面に映っている。

ポインタがその画像ウインドウをズラして、グーグルアースで探し出したその一軒家の外観画像と並べる。

住所を確認しコピー、別ウインドウの個人情報入力フォームを開いて、住所項目にペースト。

P C 操作者はラジオを聞きながら操作をしており、その音声が聞こえる。

アシスタントの声「実は私もヒューマンマイク、今日の予習と思って少し使ってみたんですけど」

パーソナリティの声「ほう！」

アシスタントの声「なんだろう、感覚としては、ツイッターに？ 近いかな？」

専門家の声「そうですね。とにかく次々と

ファイルが送信されてくるので」

パーソナリティの声「ただツイッターはツイ

ッター社が責任を持って管理してるわけ

じゃないですか。ヒューマンマイクは管理

者がいないから、どんどん送られてくる

ファイルを見て、正直恐怖を覚えました」

パーソナリティの声「一種の無法地帯。でも

それが利用者にとって魅力になっている」

専門家の声「仰るとおりです」

パーソナリティの声「なるほど。CMの後も

まだまだヒューマンマイクを掘り下げて

いきたいと思います。じゃCM」

ポインタは「申請書等（未決）」の

フォルダを開くと、検索窓に住所を

入れ、ヒットした画像ファイルを開く。

それは店員が隠し撮りした小売店の

ポイントカードの入会申込書を写した

スマホ写真で、その住所は先程の一軒

家と一致している。

再び個人情報入力フォームを開いて、空白だった名前項目に入会申込書の名前を入力、それから画像添付項目を開いて、既に添付されている女子中学生が撮影した痴漢の画像に加え、一軒家の画像も添付する。それからポイントは同じ画面の〈家族構成〉に移っていく。

○銀座の高級クラブの前

店の前に黒塗りの高級外車が列を成して停車している。その一台の前に黒服の運転手（39）が立っていて、スマホで鼎談番組を見ている。

思想家の声「ただこうしたヴァーチャルな市民ネットワークは現に中東のいくつかの国で反体制運動の原動力になっていて、結局ピアトゥピアだから政府も規制のしようがない。その意味では民主主義の希望かなっていうところはある」

掲示板創設者の声「まあ、良いも悪いも使う人間次第ってことですかね」

起業家の声「なんだよその締め！」

思想家の声「一番卑怯だよね」

クラブから数人の和服のホステスと

ボーイが、運転手の雇い主である店の上客の見送りに出てくる。

それを見て運転手はスマホをしまう。

雇い主の姿はカメラには映らない。

ホステス1「近いうちに是非またいらして

下さい」

運転手の雇い主の上機嫌な笑い声。

○繁華街近くの公園

甲斐がスマホでピッカリンの動画を

見ていると、ユーザーニーズのアプリから配達依頼の通知が入る。

タップして依頼を受け、配達リュックを背負って自転車で走り出す。

○東京都心の夜景・空撮

○コンビニ1・事務所

モニターで中国人店員・ヨウの接客を眺めながら独りごつ店長（33）。

その後ろのロッカーで宇川（26）が私服から制服に着替えている。

店長「仕事が粗いなあ……先にお釣り返さないとダメだよお……ここ日本なんだからさあ……自分の国と違うって分かってないんだよなあ……」

制服に着替えたばかりの宇川がそれを聞いて、今度は制服を脱ぎ始める。

宇川「あ、店長、すいませんけど自分今日で辞めますんで」

店長「え、なに、どういうこと？　なんかあった？」

宇川「いや、なんか急にムカついたんで」
店長「なんか？　なんかかって？」

ロッカーから手荷物を取り出す宇川。

店長「え、帰るの？ 宇川くん、今日夜勤
だけど」

宇川「あ、はい、帰ります。お疲れ様です」
事務所を出て行く宇川。

○都内ターミナル駅の駅前広場

リュックを背負った三田村（45）と
ママチャリを傍らに停めている外山
（28）が談笑中。

二人から少し離れた所で田中（23）
が一人でスマホをいじっている。

外山「え！ 三田村さん黒沢清知らないん
ですか？」

三田村「知らない。黒澤明なら知ってる」
外山「（笑い）黒澤明は知ってて当たり前前

じゃないすか。マジかあ、やっぱ日本じゃ
マイナーなんだなあ。世界的には有名な
映画監督なんですけどね」

そこにトートバッグを持った半沢が
やってくる。

半沢「おはようございます」

外山「おざつす」

三田村「おはよう」

田中は返事をせずに軽く頭を下げる。

半沢「(見て) 田中さんでしたっけ？」

田中「あ、はい」

半沢「半沢。半沢直也。よろしく。(順に

指さし) 三田村さん、外山くん」

三田村「さつき紹介した」

半沢「あそうでしたか(辺りを見回し)

あれ、寺門さんは？」

三田村「タバコ行ってる」

半沢「ああ」

外山「今日、何件すか？」

半沢「四件」

外山「やった」

スマホで時間を確認する半沢。

半沢「お、ちょうど十二時」

外山「行きますか」

○同・喫煙所

半沢と他の三人がやってきて、喫煙者たちの中に座ってタバコを吸う寺門（54）を見つける。

半沢「寺門さん、行くよー」

寺門「はいはい」

火を地面で消して立ち上がる寺門。

○ネットカフェ・共用部

カップに注がれるドリンクバーのコーヒー。

疲れ切った表情のベトナム人女性・リン（24）がそのコーヒーを手に取って一気に飲み干す。

それからもう一杯コーヒーを注ぐ。

注いでる間、受付付近のフリースペースに設置された音量を絞ったテレビを見ていると、先程の報道番組で失踪した技能実習生が不法滞在で入管に収容されたとのニュースがやっている。

テレビをジッと見つめるリン。

× × ×

テレビ――

キャスター「次です。パワハラが原因と見られる飛び降り自殺で労災認定された浜口千波さんの死から3年が経ち、今日、遺族が労働法改正を訴える会見を開きました」

○黒塗りの高級外車の車内から（移動中）

BGM・・カーステレオの演歌

歩道を半沢たち五人が歩いているのがフロントガラス越しに見える。

○歩道

高級外車が五人の横を通り過ぎていく。歩きながらスマホで何か確認している半沢、タバコを吸っている寺門、ママチャリを押ししている外山。

寺門「ヤクザだ。あれヤクザ乗ってるよ」

半沢「（笑って）ヤクザすかねあ？」

三田村「後部座席スモーク張ってた」

寺門「悪い奴ほどよく走るってな」

半沢「なんじゃそら」

外山「あ、黒澤ですか？ 『悪い奴ほどよく

眠る』。寺門さん映画観るんすか？」

寺門「（外山を見ずに）うーん、見るよー」

外山「あれ良いっすよね、『悪い奴ほどよく

眠る』。俺めっちゃ好きなんすよ」

寺門「そうだねー」

半沢「そうだ田中さん、今日研修二日目でしたっけ？ ちょっと引き継げてなくて」

三田村「説明だけ。実地研修は今日初めて」

半沢「ああ。じゃあ今日は、とりあえず見て下さい。今日は田中さんに何かやってもらう必要はないんで」

田中「（小声）はい」

半沢「（田中見て）そんな堅くならないで大丈夫ですよ。ここはみんな優しいから」

甲斐が入ってくる。

甲斐「こんばんはー、ユーザーニーズです」
雑誌の品出し中のヨウが振り返る。

甲斐「あ、どうも、ユーザーニーズです。

お届け物のお引き取りに伺いました」

ヨウ「お届け物？」

ビニール袋に入った注文品を持った
店長が事務所から出てくる。

店長「あ、すいません、こちらですー」

甲斐「えー、番号がA66B24の、えー、

柴田様宛、お品物がゴキコロリとカフエ
ラテでお間違いないですか」

○ 歓楽街

宇川が歩いている。

キャッチの男が声をかける。

キャッチ「おっぱいっぱい三千円！

どうすか！」

心ここにあらずで通り過ぎる宇川。

○ギスギス動画の映像

汚物マンがモノマネをしている。

汚物マン「コマネチ！ コマネチ！

ダンカンばか野郎！ ガツペムカつく！」

玄関ベルが鳴る。

汚物マン「（振り返って）お、来たかな」

部屋を出て行く汚物マン。

○汚物マンの家・玄関

黒手袋をはめた半沢がロープで背後から汚物マンの首を絞めている。

三田村は汚物マンの口をタオルで塞ぎ、

寺門は手足をゴムチューブで縛って

動かないようにしている。

汚物マンに手を下す半沢たちを、並ん

で眺めている外山と田中。

やがて、汚物マンは動かなくなる。

半沢「外山くんカウントお願い」

腕時計を見つめる外山。

間。

半沢「十五秒経った？」

外山「今なりました」

半沢「じゃ、三田村さん脈拍お願いします」

汚物マンの脈拍を測る三田村。

三田村「脈拍なし」

半沢「最終確認写真お願いしまーす」

外山「はい」

死体の首を絞める半沢。三田村と寺門はしやがんで死体を支える。

外山はスマホで半沢と汚物マンの死体を写真に撮る。

半沢「OK、降ろしまーす」

寺門「おいよ」

床に死体を横たえようと、半沢たちはこやかに田中を見る。

半沢「基本的な流れはこんな感じです」

○古びた民家

頭から血を流して床を這いずる老婆。

室伏（22）がその背中を踏みつけ、

手にしたサバイバルナイフで突き刺す。
諏訪（73）が慣れない手つきでその
光景をスマホに撮っている。

双子の田野辺兄弟（36）が鏡映しの
ようにダンスの中身をかき回したり
して部屋を荒らしている。

老婆の娘が部屋の隅で固まっている。
室伏は彼女を一瞥すると、スマホを
取り出してディスプレイを見る。

そこには彼女の写真が映っている。
室伏はスマホから顔を上げて、老婆の
背中からナイフを引き抜くと、ゆっく
りと老婆の娘に近づいていく。

半沢の声「まあ発注ごとにやることは違う
から、一度に覚えようとしなくても大丈夫
ですから」

三田村の声「未だに全部覚えられない」
半沢の声「ですよ。失踪に見せかけて

殺す場合もあるし、物盗りとか事故に見せ
かける場合もあるし、もう発注の数だけ」

○ネットカフェ・座敷席の個室

備え付けのキーボードの上に置かれたノートパソコンに突っ伏してリンが寝ている。そのディスプレイの明かりが彼女の後頭部を照らしている。

スマホのバイブ。

リンはビクつと目を覚まして、その拍子にデスクに置かれたコーヒーがこぼれる。

ティッシュで適当にコーヒーを拭くと、リンは急いでスマホを見る。

それからノートパソコンに向かって、何かを入力し始める。

スマホには汚物マンの首を絞める半沢の画像が映っている。

半沢の声「心配しなくても大丈夫、難しくありませんよ。基本はエリア担当から送られた指示書通りに作業すればいいだけだし、何か困ったことがあったら自分たちフオローしますから」

○ギスギス動画の映像

汚物マン不在のままライブ配信は続いている。

彼を心配する視聴者のコメントが画面に流れている。

○汚物マンの家・トイレ

扉を開けたまま、鼻歌交じりに小便している寺門。

半沢「(来て) 寺門さん、証拠残るから一応トイレは公衆便所であって」

寺門「蟹工船じゃあるまいし。小便ぐらい好きな時にさせろ。基本的な人権の侵害だぞ」

○高層マンション・高層階の廊下

玄関ドアが開いて、甲斐の前に不機嫌そうな表情で乳幼児を抱いた若い女が現れる。わんわん泣いている乳幼児。

甲斐「お待たせしました、ユーザーニーズです(配達リュックから品物を出し)」

えー、柴田様でお間違いないー」

若い女は引ったくるように袋を受け取る。

甲斐「あ」

それからドアを閉めて鍵を掛ける。

甲斐はリュックを背負って、スマホをいじりながらエレベーターに向かう。

甲斐「建物名ぐらいちゃんと書いとけよ。

わかんねえじゃねえかよ」

スマホ画面にヒューマンマイクの受信通知。

アプリをタップすると、柴田明美不倫

セックスというファイル名の動画

ファイルが出てくる。

振り返って先程の部屋を眺める甲斐。

○川に近い住宅地

談笑しながらどこかへ向かう半沢ら。

彼らについていく田中の表情は暗い。

半沢はチラと心配そうに彼を見る。

外山「あと三件、あと三件。(半沢に) 今日

早く帰れますね」

半沢「今日はね」

外山「え、なんすかそれ」

寺門「担当がさ、あのベトナム人だっけ？

あの人に代わってから酷くなったよな」

三田村「先週七件」

外山「マジすか。うわ休んで良かったあ」

寺門「現場のことを分かってないんだよ。

全部机上の空論。ありやダメだ」

半沢「まだ慣れてないんじゃないですか。

そもそも指示書の質が悪いっていうのも

あるし」

寺門「あれベトナム人じゃないの」

三田村「指示書は外注」

半沢「クラウドソーシングで副業狙いの素人

に外注してるんですよ」

寺門「へえ、それ初めて知ったー」

半沢「ターゲットの情報をダークウェブの

マーケットで仕入れて、殺害に最適な日時

と場所割り出して、指示書にまとめて。

結局副業でできるような仕事量じゃないから、騙されたことに気付いてすぐ辞めるか、クオリティ下げて機械的に納品するか、どっちにしてもシワ寄せは現場に来るっていうね」

外山「マジすか。最悪じゃないすか」

半沢「だねえ」

長い橋に差し掛かる一行。

田中「さっきの奴はなんで殺したんですか」

田中を見る一同。

寺門「田中くんはなんでここ来てるの？」

お仕事でしょ」

田中「いや、そうじゃなくて、誰に何の目的で殺しを依頼されたのかわかって」

半沢「どうなんだろうね。指示書にはそういう情報書いてないから。作業日時、場所、方法、対象ぐらいかな。見る？」

スマホでPDFの指示書を見せる

半沢。目を逸らす田中。

半沢「あんまり深く考えなくても平気ですよ。エリア担当の仕事だから、そういうのは」

○ネットカフェ・座敷席の個室

ノートパソコンで指示書に目を通して
いるリン。

そこに「九時五〇分あたりで対象者は
暖簾を下げ」の文を見つけ、

リン「だん……？」

「暖簾」をコピーして、オンラインの
機械翻訳にかける。

リン「のれん……」

ボーツとその文字を眺めるリン。

ふと、別ウインドウにしている業務
管理アプリのタスクに目をやると、

「本期限！」の表示が十三件。

スマホでチャットアプリを開く。

×

×

×

スマホ画面――

リンが出したへカジさんへへのいくつもの指示書の催促メッセージが、全て未読になっている。

○道路工事現場

交通誘導中の現場警備員・カジさんのポケットのスマホが振動しているが、現場の騒音と振動で彼は気付かない。

○ネットカフェ・座敷席の個室

溜め息と舌打ちをして、カジさんへの電話を切るリン。
立ち上がって個室から出て行く。

○サウナ・外

看板——経年劣化が著しい。

× × ×

裏口——

半沢らが外階段に続く扉の前にいる。
半沢は鍵の掛かった扉を手持ちの鍵で

開けようとしているが、合わない。

半沢「あれ。おかしいな」

外山「他の鍵と間違えてんじゃないすか？」

半沢「もう一通り試したよ」

寺門「それじゃないの、それ」

鍵束の中の一本をアゴで指す寺門。

半沢はその鍵を差すが、開かない。

寺門を見て肩をすくめる半沢。

○ネットカフェ・シャワー室

シャワーを浴びているリン。

脱衣所に置かれたスマホが着信して

いるが、リンは気付かない。

○サウナ・裏口

半沢がスマホで電話をかけている。

半沢「(切って)ダメだ出ない」

寺門「ほら来たよ」

外山「もう、リンさーん」

半沢「(スマホを見て) 参ったな、裏口から

侵入って書いてあるんだけどなあ。どうします？ 飛ばして次行っちゃいます？」

寺門「それは半沢さん決めてよ。現場責任者でしょ」

半沢「うーん」

外山「やっちゃいましたよ。後からまた

戻ってくるとか面倒じゃないすか」

半沢「正面から？ でも監視カメラとかあるよ多分。指示書のルートじゃないから」

三田村「早く帰れたらなんでもいい」

寺門「時間もつたいないよ。どうすんの」

考え込む半沢。

半沢「じゃ俺、一人で行ってきますから、

ちよつと待っててもらえますか？」

外山「え、マジすか」

トートバッグから深いバケツトハット

と薄手のジャンパーを取り出して、

変装し始める半沢。

半沢「いや、全員で行ったら目立つじゃないですか。一応自分、責任者ですし、皆さん

に何かあったら困るんで」

寺門「おお、行つてらっしゃい。じゃ、そのコンビニで待ってるか」

三田村「行つてらっしゃい」

外山「お願いしやーす」

コンビニ2に向かつて歩き出す四人。

半沢「あれ、反応軽くない？」

寺門「（振り返つて）半沢さんなら一人殺るぐらい楽勝でしょう」

半沢の無表情。

○サウナ・受付・監視カメラの映像

カウンターの男に一時間利用券を差し出す半沢を監視カメラが捉えている。

○コンビニ2の外

宇川が店内から出てきて去って行く。

寺門たち四人が入り口の脇に陣取つて

タバコを吸うなりスマホを見るなり

アルコール飲料を飲むなりしている。

寺門「三田村さん下の子いくつになっただの」

三田村「今年小学校上がった」

寺門「へえ、もうそんな。四人だっけ」

三田村「そう」

寺門「大変だよねえ」

三田村「んー、一番上はもう高校出たから」

寺門「そつからまた金かかるじゃない」

三田村「大学行かなかったから。今ガソリン

スタンドでバイトしてるみたい」

寺門「みたいって、なに、教えないの？」

三田村「顔合わすと怒る」

寺門「カッカッカ。ひでえなあ。誰のお陰で

飯食えてんだってなあ。人まで殺して

なあ。言ってやれよ」

外山「いや言えないっすよ！ 言えるわけ

ないじゃないすか！」

寺門「（真顔で）うん、わかってる、冗談」

○サウナ・浴場

水風呂に入ったまま漫画を読んでいる

背中に和彫りを入れた男を、洗い場に座った半沢が横目に見ている。

浴室には二人の他に誰もいない。

半沢「(独り言) ヤクザじゃねえかよ」

サウナ室に入っていく和彫りの男。

半沢「殺ればいいんだろう殺れば。くそ」

半沢はロープとスマホを包んだタオルを手にサウナ室に入っていく。

それから、ヨボヨボの老人がたど

たどしい足取りで浴室に入ってくる。

○コンビニ2の外

外山「え、三田村さん埼玉から来てるん

すか？」

寺門「埼玉のどこ？」

三田村「熊谷」

寺門「熊谷！ はああ」

外山「え、めっちゃ遠くないすか！」

三田村「片道一時間半」

外山「(笑) めっちゃ遠い」

寺門「派遣だつてさ、都内と都外じゃ全然

条件違うもんね。大きな声じゃ言えないけど埼玉の案件なんてしよっぱいでしよう」

三田村「東京の半額ぐらい。一勤務三万」

外山「安！」

寺門「それじゃあやってらんねえよ」

田中「なんでそんな仕事やってるんですか」

間。

田中「特に深い意味とかないですけど……」

外山「俺たちそういうの聞かないようにして

るんすよ、お互いに」

三田村「お互いに」

間。

寺門「また変なの入ってきてちやつたよ」

寺門は苛立たしげに溜め息をつくくと、

タバコに火を点けて一同から目を

逸らす。

寺門の視線が何かを認めて止まる。

ほかの三人もその視線を追うと、

道路の向こうに一台のバンが停まって

いて、その助手席から末井（60）が
寺門たちをじっと眺めている。

○ファミレス

ノートパソコン画面――

業務管理アプリに転送された未読メッ
セージの山。

メッセージのタイトルは〈Re…一個
処分の見積もりの件〉〈死因が希望し
たものと違う〉〈返信がなかったため
二度目の問い合わせです〉など。

× × ×

それを疲れ切った眼差しで眺めていた
リンが、テーブルで充電中のスマホに
視線を移す。

不在着信が一件。リンはそれを無視
して、ノートパソコンでメッセージの
返信を書き始める。

スマホが着信するが、リンはそれを
一瞥して、構わず返信を書き続ける。

○コンビニ2の前

寺門たちと末井が揉めていると、スマホで電話をかけながら半沢が来る。

半沢「(電話切って) なになに、何事？」

寺門「お来た来た」

三田村「やっと来た」

寺門「いや、向こうの回収リストにここ入ってるらしいんだけどさ、半沢さんいないから分かんなくてさあ。回収なの？」

田中に耳打ちする外山。

外山「外注の死体回収業者」

半沢「(スマホをいじりながら) いや、こっちだとここは回収の指示出てないですね」

末井「でも、ウチはそう言われてるから」

半沢「そんなこと言われたって回収経路だつてないですよ。もうすぐ警察も来ますし。

……ヤクザ殺して客に見られてるから」

外山「え、マジすか！」

○末井のバンの中

運転席で末井の助手の金髪男・浜野
(17)がスマホをいじっている。
と、ヒューマンマイクから受信通知。
ファイル名は〈殺人！(グロ注意)〉
開くと、サウナのヤクザの死体画像。

○その外

バンのすぐ横に築年数四十年ほどの
古いマンションがある。カメラはその
カーテンの閉まった一室を捉える。

○古いマンションの一室

F Mラジオの深夜放送が流れている。
六畳程度の狭い部屋にPCデスクが
五六台。部屋はぎゅうぎゅうの状態。
空いた所にはダンボールや壊れた
機材、家具の類いが押し込まれて
いて、その上では男が死んだように
眠っている。

他の若い男たちは無心にPCのキーを

叩いて個人情報をもとめている。

スマホのバイブ音。

その中の一人がバイブしたスマホを

チェックして、すぐまた作業に戻る。

作業員 1 「(モニターから目を離さずに)

なんか面白いの来た？」

作業員 2 「お散歩しながらできるお仕事です。

中高年活躍中」

作業員 1 「(笑い) それ、応募するやついるのかな」

作業員 2 「いるから仕事が終わらない」

作業員 1 「ヒューマイで流れてくる求人とか

怪しさしかたろう。わかってんのかな。

ヒューマイで拾った個人情報をダーク

ウェブで売る汚いお仕事だつて」

作業員 2 「知らないでしょ」

作業員 1 「一件当たりいくらよ」

作業員 2 「いくらぐらいかねえ」

作業員 3 「一律十円っすよ。自分やってまし

たんで」

作業員 1 「え、そんな安いの」

作業員 3 「はい」

作業員 1 「鬼じゃん」

作業員 3 「だからこっちに切り替えました。

データ拾うよりまとめの方が楽ですし」

作業員 1 「あそうなんだあ」

作業員 2 「奴隷が奴隷を使う奴隷に格上げになつたわけだ」

会話はそこで途絶え、ラジオの音と

絶え間ないタイプ音が室内を満たす。

○コンビニ 2 の前

まだ揉めている。

末井 「でも、じゃ私たちはどうすればいいの。

いや、仮に回収指示出てたらこっちに責任

回ってきちゃうからね」

半沢 「すいませんけどそちらの担当者に確認してもらえませんか。自分もさつきから

担当に連絡入ってるんですけど全然電話

出ないんで、もう自分たち行きますから」

苛々と頭を掻きながら歩き出す半沢。
寺門たちはそれについていく。

外山「(末井に) おつかれーっす」

納得のいかない顔で見送る末井。

○湾岸部の道路

自転車で走行中の甲斐。

スマホホルダーに取り付けたスマホが
着信する。画面には「山形」の表示。
ワイヤレスヘッドセットで通話開始。

甲斐「お疲れです」

山形の声「今どこらへん？」

甲斐「いま湾岸エリア」

山形の声「成金エリアか」

甲斐「成金エリアっすね」

山形「どう、成金エリアの甲斐君の調子は」

甲斐「成金ショボイ注文しかしねーっすわ。

山形さんの方は？」

山形の声「参ったよー、注文少なくて。ヒュ

ーマイで変なファイルばっか集まるわ」

山形の声「そのために走り回ってるみたい」

甲斐「それ売るんでしょ、闇サイトに」

山形の声「えーなんでわかるのー」

甲斐「いつもやってるじゃないすか」

山形の声「いつもじゃないよー。売り上げが

少ない時だけ。今日みたいな」

甲斐「俺もさつき配達先でエロい動画拾いま

したよ。多分、不倫系のリベンジポルノ」

山形の声「なにそれ、気になる。ちよつと

後で落ち合おう」

甲斐「（笑い）完全に売る気じゃないすか。

渡さないっすよ」

山形の声「なんでー！」

○ファミレス

ノートパソコンで作業中のリン。

スマホが再び着信するが、リンは無視してキーを叩き続ける。

しかしスマホは鳴り止まない。

キータッチが少し激しくなってくる。

やがて、諦めたようにスマホを取る。

リン「リンです」

○カラオケ

ギャル風メイクのマイ（23）が

リンと電話している。

その背後では数人のキャバ嬢とホストが楽しげに歌って騒いでいる。

マイ「おっつー。リンちゃん元気ー？

ごめんね急に。寝てた？」

リンの声「起きてた」

マイ「ねえ今から遊びに来ない？ みんな

とさあ、カラオケ来てるんだけど」

○ファミレス

リン「ごめん、仕事あるから」

マイの声「そかそか。分かった。じゃね」

ブチっと電話が切れる。

リンがスマホを置いて作業に戻ろうとすると、再び着信。

リン「(出て) 今忙しいよ」
男の声「あ？」

○カラオケ

スマホをいじっているマイにデンモク
を持ったホストが寄ってくる。

ホスト「誰に電話してたの」

マイ「前に近くのアジアンパブに居た人。
ガサ入ってそこ潰れちゃったけど」

マイは別の人間に電話する。

マイ「あ、おっつー。ごめん寝てたー？」

○ファミレス

電話が続いている。相手の男の名は梶。

梶の声「リスク背負ってんの私らなんですよ。モノが死体ですからね。どういふつもりなんですかおたくら」

リン「あー」

梶の声「どういふつもりで仕事してるの？」

おーい、聞いているの！？」

リン「あー、すいません、あの」

梶の声「お前外人か？ 日本語わかります

か？ (舌打ち) もういいや、とにかく

サウナの死体は回収だとしたらもう回収
できません。おたくの作業員の不手際で

警察呼ばれたんでウチの作業員は次の現場

行かせました。OK？ アンダスタン？」

リン「はい」

梶の声「上出せ、上。お前じゃ話しになら

ねえや」

リン「あー、その……」

梶の声「(怒鳴り) だったらテメエの体で

責任取れや！」

○古びた民家

ズタズタに切り裂かれた老婆の娘の

死体を眺めている末井と浜野。

末井「あーあ、派手にやってくれちゃって」

浜野「結構飛び散ってますけど、血とか拭き
ます？」

末井「いいよ。何も指示受けてないから」

浜野「包み、一枚で足りますかね？」

末井「一枚でいいよ」

玄関に向かう浜野。途中、老婆の死体を跨いで、

浜野「こっちはどうします？」

末井「ううん、いらぬ。若い方だけ。この人の犯行に仕立て上げたいんじゃないの、依頼した人は」

浜野「え、じゃ血とか拭いとかないとやばくないですか」

末井「いい、いい、いい。指示書に書いてないことはやらない。余計なことやると怒られる」

○大きな橋

先程渡った橋を戻っている半沢たち。
気まずい沈黙が一行に漂っている。

先頭を歩く半沢の表情は険しい。

外山「そーいや俺ヒューマイ入れたんすよ」

三田村「ヒューマイ？」

外山「あれ？ 三田村さん知らないですか？

ヒューマイ」

三田村「知ってる。ヒューマンマイク。

P T Aの出会い系アプリ」

田中「P 2 Pの内部告発アプリです」

間。

外山「そつすよ！ P T Aじゃないつすよ

P 2 Pですよ三田村さん！ P T Aじゃ

ポール・トーマス・アンダーソンじゃない

すか！ P T Aはポール・トーマス・アン

ダーソンつすよ！」

三田村「誰それ」

外山「え、ポール・トーマス・アンダーソン

知らないんすか？ あれえ、日本じゃまだ

知名度低いのかなあ。世界的な巨匠映画

監督なんですけどねえ」

寺門「あのさあ！ ちよつと黙っててくん

ねえかなあ！」

半沢「いいですよ寺門さん、やめて下さい」

寺門「状況をわかってないんだよなあ。緊張感がさあ」

半沢「(田中見て) 今日イレギュラーですけど、いつもはもっと簡単なんで。まあ、心配しないでください」

前を向く半沢。

半沢「あと二人、さっさと殺って今日もう早く帰りましょう」

○牛井屋

牛井に紅生姜を乗せながら、ふと店内を見回す宇川。

他の客は交通警備員のカジさんが一人だけで、厨房ではバン格拉デシユ人店員二人がベンガル語で何か笑い話をして大笑いしている。

スマホのメール着信音。

スマホをポケットから取り出す宇川。

×

×

×

スマホ画面――

〈オーナー（コンビニ）〉の登録名
からメールが来ている。その文面は、
〈救いを求める声が誰かに届けば浜口
千波さんは死ななかつた。ヒューマン
マイクは万人に声を届ける。リンク先
からアプリをダウンロードして下さ
い。無関心は終わりにしよう〉

× × ×
しばしその文面を眺めたのち、宇川は
メールをゴミ箱に入れる。
それから牛井をかき込む。

○団地の廊下

団地の一室の玄関を鍵束で開けようと
している半沢。

寺門 「頼むぞ今度は」

鍵が開く。

半沢 「（笑顔で） そう悪いことばっか重なり
ませんで」

○団地の一室・玄関く居間

半沢たちが静かに入ってくる。

室内は明かりがついていて、奥の部屋からはアニメの音が聞こえてくる。

音に向かっていく半沢たち。音は居間に隣接した和室から聞こえる。

半沢が和室の襖を開けると、そこにはタブレットでアニメを見る3歳ぐらいの女兒が一人。

女兒は振り返って半沢たちを見る。

女兒「だれ？」

外山「(半沢見て)これ？」

スマホの画像と女兒を見比べる半沢。

半沢「この子だね」

手袋をしながら半沢は腰をかがめて、

半沢「こんにちは」

女兒「……こんにちは」

三田村が女兒に歩み寄る。

半沢「三田村さん行く？」

三田村「子供の扱いは慣れてる」

スマホでそれを撮影しようとする外山。

半沢「まだ撮らないでいいよ。現場責任者の作業証明写真が必要ってだけだから」

外山「(スマホ降ろして) あ、そうか」

女兒「おとうさーん？　ねえおとうさーん？　変な人いるー」

身を震わせて女兒から顔を背ける田中。
ふらふらとその場から離れ、居間のテーブルに両手を突く。

背後からは女兒のもがくドタバタ音が聞こえる。

と、水洗トイレを流す音。

一斉に音のした方を見る一同。

三田村の手を逃れた女兒が部屋の隅に逃げて大声で泣き出す。

トイレから女兒の父親が出てきて、半沢たちを見る。

女兒の父親「あれ、まだ終わってないの？

(女兒に) メグ、ちよつと静かにして。今お父さん大事な話してるから」

女兒は泣き止まない

半沢「あの」

女兒の父親「おい、静かになって言ってるぞ」

半沢「いやあの、すいません、失礼ですけど、どなたですか」

女兒の父親「（自分を指差し）依頼人。聞いてない？」

居間でテレビを見始める女兒の父親。

女兒の父親「殺しの人でしょ。早く済ませちゃってくれないか。明日仕事なんで」

半沢「あの、ちよっと困るんですが」

女兒の父親「なにが」

半沢「原則的に作業時の第三者の立会いはお断りしてますんで」

女兒の父親「ああそうなの？ そんなこと

言われなかったけど」

半沢「営業担当とのやりとりの詳細は私どもは存じ上げませんが、ですが、そうした形での作業はしてないんですよ」

女兒の父親「じゃコンビニ行ってる？」

女兒の父親「それでいいの？」

半沢「（苦笑）そういう問題じゃない。あの、私どもはお客さんを知りませんし、お客さんの方も私たちを知らない前提で――」

女兒がますます激しく泣く。

女兒の父親「メグ！ いい加減にしないとイタイイタイするぞ！」

田中「このド畜生が！」

女兒の父親に掴みかかる田中。

半沢と寺門が止めに入る。

田中「お前が死ねや！」

寺門「なにやってんだよタコお前！」

女兒の父親「こつちじゃないって（女兒を差し）あっちだって」

半沢「田中くん落ち着いて、とりあえず落ち着いて」

田中「アホかあああ！」

女兒の父親から田中を引っ剥がして床に倒れ込む半沢と寺門。

その光景を呆然と眺めている外山、

女兒にタブレットでアニメを見せて
落ち着かせようとしている三田村。

女兒の父親は呼吸を荒げ、乱れた服を
直しながら、倒れた三人を見ている。
急に顔を上げて外山を見る女兒の
父親。外山は咄嗟に近くに置いてあつ
た木製バットを手に取る。
間。

突然、女兒の父親は怯えた顔で玄関に
向かう。

寺門「おいおいおい、ちよつと待て。おい」
靴下のまま玄関に踏み出し、扉に手を
かけたところで、半沢が彼に向かって
突進する。

○団地の廊下

一瞬だけ扉が開くが、女兒の父親の
首に背後からロープを引っ掛けた
半沢が彼を部屋に引きずり込み、
扉は閉まる。

○二世帯住宅・和室

介護ベッドに横たわる老人の口と鼻を水で濡らした雑巾で塞いだり離したりしている田野辺兄弟。

それを被写体にスマホのカメラの練習をしている諏訪。

その傍らで、スマホで動画付きまとめサイトを見ている室伏。

記事の見出しは〈千波母「犯人も自殺して欲しい」(動画あり)〉

室伏「ちゃんと写真撮れるようになった？」

諏訪「ええ、もう、だいぶ、お陰様で」

室伏「あっそう」

記事に埋め込まれたユーチューブのワイドショー動画を再生する室伏。

動画は記者会見のもので、その中では母親の浜口千明が思いを語っている。

千明の声「千波が旅立ってから三年も経てば、少しは気持ちの整理もつくかと思いましたが、しかし、未だに私の気持ちの整理は」

千明の声「つきません。もう二度と娘のような悲劇があつてはならない」

そこで場面は質疑応答に切り替わる。

記者の声「千波さんにパワハラを行った元同僚の名前もインターネットでは拡散されていますが、彼については」

間。

千明の声「一時は自殺して欲しいとすら思いました。しかし今は、ただ生きて、反省して、もう二度とそんなことをしないで欲しいとだけ思っています」

室伏「(スマホから顔を上げ) 死んだ？」

いつの間にか動かなくなっている老人。

田野辺兄弟は同時に室伏を見て、同時にサムズアップする。

○ファミレス

手をキーボードに置いたまま舟をこいでいるリン。

店員「お客さん」

ビクッと目を覚ますリン。

店員「困ります。寝るのでしたらお帰りいただけますか」

首を横に振るリン。

侮蔑の眼差しでリンを眺め、それから店員は去って行く。

テーブルの上のスマホが着信する。

バイブし続けるスマホを、リンは微動だにせず眺めている。

○団地の一室

トイレから小便の音。

リンに電話をかけながら玄関を眺めている半沢。

外山もテーブルの上に置かれた菓子を食いながら同じ方を見ている。

彼らの視線の先には玄関に倒れた女兒の父親の死体と、玄関ドアを開けた

ままそれを見ている末井と浜野がいる。トイレを流す音。

末井「(顔を上げ) 来るの早すぎた？ (こい)、
子供じゃなかったっけ？ 回収」

トイレから出てきた寺門が末井と浜野
を二度見して立ち止まる。

× × ×

半沢たちと末井たちが口論している。

三田村はそれを見て、和室の中から
襖を閉める。

半沢「(電話をかけつつ) いや、だから今
担当と連絡取ろうとしてるんでちよつと
待ってくださいよ」

末井「困るなあ、こっちも次あるから」

寺門「定刻より早く来たのはお前らだろが」

浜野「お前って言った？ え、今お前って
言った？」

寺門「お前に言ってるんじゃないんだよ」

半沢「喧嘩はやめてくださいよ！ 仕事が

余計長引くだけですよ！ 日の出前に帰れ
なくてもいいんですか！」

末井「そうだね。じゃあ、あの子供持ってくよ。はい」

外山「はい、ってなんすか？」

末井「殺しちやってよ。はい」

外山「いやいやいや」

浜野「そっちの仕事じゃないの？ 自分

たち死体の運搬しか言われてないですよ」

寺門「（女兒の父親を指差し） じゃついでに

そいつも持ってけよ」

末井「いや、それは指示されてない事だから

……言っちゃ悪いけど尻拭いは、ねえ」

寺門「誰が好きで殺すか。半沢さんが殺ら

なかったら全員危なかったの。サツなんか

タレ込まれたらお宅らだってタダじゃすま

ないだろうが」

一瞬、寺門を睨む半沢。

末井「その言い方はおかしいじゃない。私ら

なにも頼んでないですよ。指示も受けて

ませんしね」

外山「指示指示って馬鹿の一つ覚えか」

浜野 「誰が馬鹿だよ、おい、クズ」

半沢 「もういいですから落ち着いて下さい！
わかりましたから！ とにかく自分たちの
一存で判断できる状況じゃないんですよ！
いま連絡取ってますから！」

末井 「出ないじゃない。さっきからずっと」

寺門 「あんたらもさ、お上に報告した方が
いいんじゃないの。評価下がるからって
隠蔽したら塵も積もるよ。今回はあんたら
も瑕疵あるんだし」

末井 「瑕疵なんてないですよ」

寺門 「指示書通りの時間に来なかったじゃ
ねえか」

末井 「(半歩退いて) 来てませんよ」

寺門 「いや来てるだろ！」

外山 「アウトソーシングとかマジ糞！」

浜野 「末井さん、それは俺も来てると思う」

末井 「いや仮にそうだとしてもね？ 指示

守ってないのはお互い様でしょうよ」

寺門 「なにがお互い様だバカ。この件でどっ

ちが泥かぶると思ってんだ。半沢さんが殺したのはな」

寺門の言葉を待たずに、半沢がスマホを投げ捨てて寺門の胸ぐらを掴む。

半沢「お前それとなく俺に責任押し付けるのやめろよお！ さつきからよお！」

和室の襖が開いて、中から女兒の扼殺死体を抱いた三田村が出てくる。

それを見て黙る一同。

三田村「殺つといたから、持ってって」

死体を末井に渡そうとする三田村。

三田村「はい」

しばし躊躇ったのち、ゆっくりと死体を受け取る末井。

床の上でコールを続けていた半沢の

スマホから、リンの声がする。

リンの声「はい。どうしましたか」

(以下、通話中カットバック)

近寄ってスマホを拾い上げる半沢。

リンの声「もしもし？」

半沢「もしもし」

○ファミレス

少し震えながら電話をしているリン。

リン「はい」

半沢の声「リンさん」

リン「はい、リンです」

半沢の声「半沢です。あの、今正直、あなた
のせいで現場めちゃくちゃです」

リン「すいません」

半沢の声「謝らなくていいですよ。謝って
ほしくないんで。どうせ謝って済む問題じ

ゃないし」

リン「すいません」

半沢の声「謝るなっつってんだろ！」

リンは悟られないように泣き出す。

半沢「社長出してくれませんか。あなたじゃ
もう手に負えないよ」

○団地の一室

半沢が電話している背後では末井たちが女兒の死体をシートに包んでいる。

リンの声「社長……」

半沢「繋げないか。そうですよね。立場上ここで止めなきやいけないだろうから。

現場からのクレームは」

リンの声「あの、何が……」

半沢「ヤクザを殺した。指示書には書いてなかった。依頼人が現場にいた。指示書にはなかった。それも殺した。ヤクザ殺しは目撃された。報告なんて出来ませんよね、自分の責任になるから。でもそれでワリ食うの現場なんだわ」

○ファミレス

慌ててノートパソコンで指示書の内容を確認しようとするリン。

リン「あー、ちよ、ちよっと待って……」

来店チャイム

レジを見ると警官が来ている。

半沢の声「いいですよ、今更もう遅いから。

とにかく緊急事態だから社長と話させて下さい。できないなら通報します。知ってますから。不法在留でしょ。ブローカーに騙されてさ、大量に借金背負わされて。

家族の連帯責任になるから帰ろうにも帰れない。知ってるんだよ。脛に傷のあるやつしかこんな仕事はやらないから。ブローカーって社長？ そのお友達？ どっちでも同じか」

リンの視線に気付いた警官が怪訝な表情を浮かべる。

凍りついたように警官を見続けるリン。

半沢の声が遠のいていく。

レジに店員がやってくる。

店員「お待たせ致しました、一名様ですか」

警官「あ、持ち帰りってやってます？」

店員「申し訳ございません当店テイクアウトは行っていませんですよー」

警官「あそうですか、どうも」

店を出ていく警官。

半沢の声「聞いてます？」

我に返るリン。

リン「はい」

半沢の声「三〇分以内に連絡を。今度は社長から。なかつたらあなたを通報します」

○団地の一室

末井と浜野が大きなポストンバッグに
女兒の死体を入れて部屋を出ていく。

半沢「俺もこんなこと言いたくないですけど、
責任者として現場の人間守らなきゃいけないんで。
すいませんけどお願いします」

電話を切る半沢。

寺門「名演説」

全員を見る半沢。

半沢「次、今日の最後、行きましょう」

田中はゆっくり顔を上げて半沢を
見つめる。

○ファミレス

スマホ画面――

連絡帳にある〈社長（しゃちょう）〉のページが開かれている。

顔写真はなくメールと電話番号のみ。

× × ×

その画面をじっと見つめているリン。

○コインランドリー

黒服の運転手が回転する洗濯ドラムを椅子に座ってボーツと眺めている。

と、スマホの着信音。

運転手「（電話出て）はい……コインランド

リーです……いえ、すぐに行きます」

立ち上がって外へ出て行く。

ドラムが止まって、洗濯終了を告げる

ピー音が鳴る。

○ファミレス

連絡帳の画面を開いたまま、リンは

スマホをテーブルに叩きつけるように置いて、大きく息を吐く。
天井を見上げる。

リン「ミエキエツプ（くそつたれ）」

顔を下ろすと、リンはなにか決意したような表情でスマホを手に取る。
忙しいタップ。

× × ×

スマホ画面――

汚物マンを殺害する半沢の画像。

○同・厨房

暇そうにスマホを見ていたキッチン担当。ヒューマンマイクの受信通知。

× × ×

スマホ画面――

ずらりと並んだ画像ファイル。そのファイルはどれも「人殺しを殺してください。お金を払います」と題されており、キッチン担当がその一つを開く

と、半沢が汚物マンを殺害する画像。

○ファミレス・客席

物凄い勢いでノートパソコンにタイプしているリン。時折、横に置いたスマホをタップする。

× × ×

ノートパソコン画面――

半沢ら五人の個人情報ファイルが次々とスマホに送信されていく。

顔写真、自宅、電話番号、家族構成、家族写真、職業、学歴、趣味……。

× × ×

スマホ画面――

PCから送られたそのファイルが次々ヒューマンマイクの送信リストに入れられていく。

○同・外

歩きスマホでファミレスから出てきた

若い男がファイルを受信する。
いくつかあるファイルの中から、男は
歩きタバコをする寺門の画像を開く。
店の前の信号で停まっていたタクシー
が、信号が変わって走り出す。

○そのタクシーの車内

乗客の会社員がタブレットで三田村の
家族写真画像を見ている。
その他に送られてきた半沢たちに関す
るファイルを、会社員は一括で送信
リクエストに追加する。

○サウナ・受付

二人の刑事がカウンター内の男と話して
いる。その背後には店の入り口に張ら
れた規制線と、行き交う警官たち。

刑事1がカウンター内の監視カメラの
モニターを指差す。

刑事1「それ、テープ録画になってます？」

カウンターの男「だと思えますよ」

刑事1「ちよつとお預かりしても構いませんか。犯人の映像を確認しますんで」

カウンターの男「ええ、どうぞ」

刑事2に合図する刑事1。刑事2が

カウンターに入ってモニターに接続されたテープデッキをいじり始める。

カウンターの男は座ったまま、警官にディスプレイが見えない角度でスマホをいじっている。

ディスプレイにはスマホでモニターごと動画撮影した監視カメラの映像が映っていて、そこには半沢の姿がある。

○ギスギス動画の映像・汚物マンの家の前かぶり物をした生配信主がノートパソコンで生配信しながら汚物マンの家の前に来ている。

配信タイトルは〈【緊急】汚物マン
安否確認配信〉。

かぶり物の生配信主「（小声）前に来た時に合鍵作つとききました。これを使いたいと思います」

鍵を取り出してウェブカメラに写すかぶり物の生配信主。

〈許可取ったのか？〉〈犯罪行為乙〉などの視聴者コメントが流れる。

かぶり物の生配信主が鍵を扉に差すが、回しても扉は開かない。

かぶり物の生配信主「あれ」

もう一度逆方向に回すと、扉は開く。

かぶり物の生配信主「ああ。お邪魔します」

そこには汚物マンの死体を回収する途中の末井と浜野がいる。かぶり物の生配信主、二人と目が合う。それから咄嗟に逃げ出す。

×

×

×

家の中――

追いかける浜野。

呆然とその姿を見送る末井。

末井「指示されたことしかやってないのに」

○家の前の路上

逃げるかぶり物の生配信主とビニールシートを手に追う浜野。

かぶり物の生配信主「たすけてー！ たすけてー！ 警察よんでー！」

○スクランブル交差点

様々な人々がスマホを見ている。そのスマホの間をヒューマンマイクに乗って飛び交うファイル。カウンターの男が撮影した半沢の映った監視カメラのモニター映像、かぶり物の生配信主が撮影した動画もリンが流したファイルと共に流通している。

○駅前の喫煙所

室伏がタバコを吸っている。

田野辺兄弟は携帯ゲームで対戦中。

室伏の傍らでおぼつかない手つきで
スマホをいじっていた諏訪が、ふと
手を止める。

諏訪「あおう、室伏さん」

室伏「ん？」

諏訪「これ、私よくわからないんだけども、
ヒューマンマイクっていうんですか？

変な写真が送られてくるんだけど、室伏
さん分かるかしら」

室伏「どれ」

啞えタバコでスマホを受け取る室伏。

諏訪「ウイルスですか？」

ファイルを見て、室伏は少し笑う。

○住宅街

外山が自転車に乗って半沢たちの下
から去ろうとしている。

半沢のスマホが着信し続けている。

外山「止めないで下さい！ 俺たち今じゃ
賞金首なんすよ！」

半沢「別に止めないけど一人は危ないって」

外山「一緒にいた方が危ないっすよ！」

寺門「バカお前、たかだか十万の仮想通貨

報酬で人殺す阿呆がどこにいんだよ」

外山「ここにいるでしょうが！」

寺門「あそうか」

三田村「一人殺して十万なら一晩殺して十万のウチらより高い」

間。

外山「じゃどうも、お疲れ様でした」

走り出す外山。

半沢「家も特定されてるよー。俺のケータイ番号も流出してるからー」

非通知着信中のスマホを掲げる半沢。

外山「引っ越しますよ！」

半沢「わかってないなあ（電話出て）はい
もしもし半沢です」

女の声「マジで出た！」

半沢「殺すぞ死ね」

半沢は電話を切って、スマホのSIM

を引き抜くと、手で細かく割る。

○繁華街の路地裏

ネズミの群がるごみ捨て場にノートパソコンを放るリン。

捨てられたボールを拾って、思い切りパソコンに振り下ろしていく。

パソコンがバラバラになるまでそうして、リンはボールを捨てる。

それからスマホも振り上げ、同じように放り捨てようとするが、しばし逡巡したのち、その手を下げる。

ふらりとゴミ袋の山に倒れ込んで、汚らしい夜空を眺める。

誰かに電話をかけるリン。

梶の声「あああんたか。ハロー」

リン「仕事ください」

○繁華街の本通り

半沢たち四人が歩いている。

寺門「こんなところ来てどうすんの」

半沢「ほら、木を隠すなら森って言うじゃないですか」

道行く人々が半沢たちをチラチラと
見ているように半沢には見える。

半沢「人目は気になりますけど、それは狙う方も同じなんで。大丈夫、安全ですよ」

寺門「じゃどっか飲み屋入る？ もう次の現場行かないでしょ？」

半沢「次どころか二度と行きませんよ。明日からハローワーク通わなきゃ」

三田村「入ろうか。朝まで電車ないし」

半沢「三田村さん熊谷ですもんね」

寺門「田中さんも飲めるでしょ？」

談笑していたキャッチの男たちが、
急に笑い止んで半沢たちを見る。

半沢は視線に気付くが歩き続ける。

半沢「団体客狙いじゃないすか」

寺門「いやいやいや」

半沢「大丈夫ですよ」

寺門「いやいやいや」

三田村「準備しとく」

リュックの中からスタンガンを取り

出してポケットに忍ばせる三田村。

俯きながらキャッチたちを見る田中。

一行はキャッチに近づいていく。

徐々に近づいて……それから、何事も

なく通り過ぎる。

背後からキャッチたちの笑い声。

胸を撫で下ろす四人。

寺門「くそつたれの若造が」

突然、包丁を手にした男が人通りの

中から現れて、寺門の脇腹を刺す。

周囲から悲鳴とどよめき。

半沢たちは振り返ってそれを見、慌て

て逃げ出す。

半沢「走って！」

何度も刺して寺岡が動かなくなると、

包丁の男は片手に持ったスマホでその

死体を動画に撮り始める。

包丁の男「殺したぞお。ほらあ」

キャッチたちが包丁の男を取り押さえようと飛びかかる。

○外山のアパート

アパートの前に自転車を停めて、二階に上がっていく外山。

部屋の前にはユーザーニーズ配達員の山形（30）がいて、外山に背を向けて配達リュックをガサゴソと弄っている。配達リュックには赤いピースマークの缶バッジが見える。

階段を上がった所で立ち止まる外山。

山形「（振り返り）あ、大村さんですか？」

外山「いえ、違います」

山形「じゃ外山さんですね」

配達リュックから改造ガスガンを取り出して外山の頭を撃つ山形。

外山は衝撃で階段を転げ落ちる。

山形「それは自衛用の改造ガスガンだから

単なる威嚇ですけど、こっちは殺す用です
んで、諦めて下さい」

山形は配達リュックから山刀を取り
出すと、階段を降りていく。

○レンタルビデオ屋

コミックやCDレンタルの充実した
店内を宇川がぶらぶらしている。

その背後では黒人店員が返却CDを
棚に戻している。

来店チャイムが鳴る。

黒人店員「いらっしやいませー」

○古びた民家の並ぶ住宅街

警戒しながら人気のない道路を歩いて
いる半沢たち。

ランニングシャツの男が、アパートの
ベランダでタバコを吸いながらスマホ
をいじっているのを田中は眺める。

半沢がトートバッグから折りたたみ

ナイフを取り出して田中に差し出す。

半沢「持つといて。頼りないけど、ない

よりはマシだから」

恐る恐る受け取る田中。

前方のゴミ捨て場にペットボトルや

空き缶の回収箱が置かれている。

そこに大きな回収袋を自転車の荷台に

積んだホームレスがやってきて、缶を

回収し始める。

半沢「なんでもないさ。なんでもない」

三田村「なんでもない」

歩き続ける半沢たち。

× × ×

アパートのベランダ――

ランニングシャツの男のスマホカメラ

が、歩き去る三人の姿を捉えている。

× × ×

回収を終えたホームレスがどこかへと

去って行く。それを目で追う三田村。

木造家屋の向こう側を見上げる半沢。

そこは海辺の新興住宅地で、真新しい高層マンションが、木造家屋の群れを見下ろすように立ち並んでいる。

○高層マンション・部屋の玄関

甲斐から注文品のコンビニ弁当を受け取ったピツカリンがストップウォッチを止める。

彼の背後にはその様子を自撮り棒付きスマホで撮影する仲間たち。

ピツカリン「出た！ 17分58秒！」

ストップウォッチを仲間のスマホに写すピツカリン。

ピツカリン「お兄さんめっちゃ早いじゃないすか！ え、なんかスポーツとかやってました？」

甲斐「いや別に」

ピツカリン「どうすか、新記録ですけど！」

甲斐「（スマホを見て）すいません、次の注文入っちゃったんで」

ピツカリン「あ、これはどうも失礼致しました！ お疲れ様です！　そしておめでとうございます！」

仲間の一人がクラッカーを鳴らす。

甲斐は去ろうとして、振り返る。

甲斐「ユーチューバー？」

ピツカリン「そうです！　ピツカリンと申します！　よかったら動画見て下さい！」

甲斐「ピツカリンね。頑張ってください」

○同・エレベーターの中（下降中）

ぼーっとしている甲斐。

○同・一階の防災センター

警備員に入館証を返却する甲斐。

○同・エントランス前

中から出てきた甲斐が立ち止まる。

それから振り返って、50階もある煌々と輝くマンションを見上げる。

山形がロードバイクでやってくる。

山形「おーっす」

甲斐「あ、山形さんだ」

山形「ねえちよつと見てちよつと見て」

山形は自転車を止めると、配達リュックを降ろす。

甲斐「なんすか。またヒューマイで拾った

エロ画像すか」

山刀の柄がはみ出ている配達リュックを山形は開けていく。

甲斐「なんか見えてますけど」

リュックが開くと中に外山の生首が。

山形「(甲斐見て) すごくない？」

間。

甲斐「いや、全然意味わかんないです」

山形「知らない？ 連続殺人鬼だって。今

ヒューマイで流れてる。一人殺すと十万」

甲斐「はあ」

山形「本当だよ。仮想通貨払いだけど、画像送ったらちゃんと振り込まれてた」

甲斐「はあ」

山形「本当だって！ ほら、あれ。なんか

あるじゃん、そういう匿名サイト。そこで
画像とかIDやり取りして」

甲斐「いや、わざわざ首を狩る理由とか、
なんで首を狩る凶器を持ち歩いているのか
とか、そういう疑問は確かにありますけ
ど、信憑性を疑ってる訳じゃなくて」

山形「じゃあ、なに」

甲斐「ちよつと唐突すぎて訳わかんなくて」

山形「なんで」

甲斐「だって……山形さん、たった十万で
人殺したんすか？」

間。

山形「金田君は千円で殺されたよ」

○片側二車線の大通り（回想・夜・雨）

ユーザーニーズ配達員の金田が必死で
ロードバイクを漕いでいる。その配達
リュックには赤い缶バツジ。

タクシーが前の車両を抜こうとして
左車線に入ってくる。

道路脇を走る金田は振り返ってタクシ
ーを視認すると、それを避けようと
後ろを見たまま路肩に車体を寄せる。
瞬間、グレーチングの側溝に前輪が
滑り、金田はタクシーの前に倒れる。

○高層マンションのエントランス前

甲斐の配達リュックに付けられた赤い
缶バッジのクロースアップ。

山形「1000円の注文、310円の報酬、
雨天配達インセンティブの100円で」

間。

甲斐「1000円の注文じゃない。アイス
コーヒーは無料クーポンだった」

○カラオケの個室

一人で歌謡曲を歌っている宇川。

空しくなったのか曲の途中で突然歌う

のをやめて、自分以外に誰もいない
室内を眺める。

○カラオケの外

宇川が店から出てくる。

入り口の脇ではマイ達が騒いでいる。

○海辺の新興住宅地の道路

高層マンションが建ち並ぶ地域を無言
で歩いている半沢と三田村と田中。

辺りは人通りも車の往来もなく、波の
音と三人の足音だけが聞こえている。

半沢「静かでいいですね」

三田村「そうだね」

半沢「やっぱ静かな方がいいな……ああ、
しくったなあ。全部俺の責任ですね」

三田村「そんなこともない」

半沢「すみません。田中さんも初日から」

言いながら半沢が振り返ると、無灯火
のロードバイクに乗った甲斐が田中の

すぐ背後までやって来ている。

半沢「人！」

慌てて飛び退く半沢。自転車を走らせながら、携帯空気入れを田中めがけて片手で振り抜く甲斐。空気入れは半沢の声に驚いてよけた田中をかすめ、三田村の横面に当たる。頭から血を流して倒れる三田村。

甲斐「うお！」

甲斐はバランスを崩して、半沢たちを追い越したところで倒れる。

半沢「(三田村見て)ちくしょう」

半沢はトートバッグを地面に置くとそこから金槌を取り出して、慌てて自転車を起こそうとする甲斐に向かっていく。

半沢を見て空気入れを構える甲斐。

半沢「そんなもんで人が殺せるかよ」

何か半沢の後頭部に当たり、半沢はよろける。地面に転がるその何かを

見ると、外山の生首。

山形「お届けものでーす！」

振り返る半沢。一同の後ろに山刀を手にした山形も来ている。

山形はニヤリと笑うと、山刀を構えて三田村に近づいていく。

山形「十万円のお届けものでーす！ 十万！
二十万！ 三十万！」

山刀を振り上げたところで、三田村は彼の足にスタンガンを浴びせる。

痙攣しながら倒れる山形。三田村は山形が落とした山刀を拾うと、無造作に腹に突き刺す。

ウツ、と声を上げて一瞬固まる山形。

三田村は山形の尻ポケットからはみ出たガスガンを見つけ、引き抜く。

三田村「（半沢たちに見せて）エアガン。

持って帰ったら下の子が喜ぶかも」

その光景を眺めていた半沢が甲斐に振り返ると、彼は彫刻のように同じ

姿勢で固まっている。

甲斐「ど、どうする気だ！ この人殺し！」

半沢「いやお前から殺しにかかって来たんだろ」

甲斐の背中をハイビームが照らす。

半沢「車。うしろ車来てる」

甲斐「山形さん！」

半沢「危ないから。迷惑になるって」

甲斐を視界から外さずに道路脇にどく
半沢と田中、空気入れを構えたまま
追従する甲斐。

ハイビームを放つ黒塗りの高級外車が
近づいて来る。

半沢「三田村さん、車」

山形の財布の中身を検めていた三田村
は、そこに山形の家族写真を発見する。
それから近づく車を見て、何気なく
ガスガンを向ける。

三田村「バン。バン」

車は停止することなく突っ込んで、

三田村は撥ね飛ばされる。

驚きの表情を浮かべる半沢たち。

停車する車。半沢が見ていない隙に

自転車で逃げ出す甲斐。

飛ばされた三田村が上半身をふらふら

と起こすと、車は彼を再度轢く。

動かなくなる三田村。啞然とする半沢。

車は半沢たちの方に方向を変えようと

している。

半沢「は……走れ！ 走れ走れ！」

半沢と田中は走り出す。

車は二人を追う。

○その車内から、逃げる二人が見える

BGM…カーステレオの演歌

○高級高層マンションの入り口前

敷地内に逃げ込む半沢と田中。

田中が転んで噴水に落ちる。

半沢は振り返るが、足を止めずに

エントランスの中に入っていく。

○高級高層マンションのエントランス

息を切らして駆け込んできた半沢が
オートロックドアに激突する。

半沢「くそ」

キッと受付に座っている夜間コンシエ
ルジュを睨みつける半沢。

半沢は状況が飲み込めず警戒の表情を
浮かべるコンシエルジュに近づく。

と、車が自動ドアを突き破ってエン
トランスに突っ込んでくる。車はその

ままオートロックドアを突き破ると、
速度を緩めることなく壁に激突する。

警報ベルの音が響き渡る。

半沢は困惑の表情でその光景を眺め、
小走りにエントランスから出て行く。

口をポカンと開けたコンシエルジュ
は、おもむろにスマホを取り出すと、

事故車を撮影し始める。

○エントランスの前

田中が噴水から出てくると、そこに半沢がやってくる。

田中「なんなんです」

半沢「知らないよ」

○高級高層マンションのエントランス

大破した車。

その運転席から黒服の運転手がよろけながら出てくる。車に寄りかかってタバコを吸い始める黒服の運転手。それから思い出したように後部座席のドアを開けると、中から雇い主の中年男がごろりと出てくる。死んでいる。黒服の運転手もその傍らに倒れる。タバコの煙を感知したスプリンクラーが作動して、大雨になる。

○大通り

半沢と田中が息を切らして横道から

出てくると、そこに室伏たちが待ち構えている。立ち止まる二人。

室伏「ボロボロじゃないすか、半沢さん」

半沢は金槌を構えようとして、何も持っていない手を振り上げる。それを見て金槌を落としたことに気付く。

室伏「何もしないっすよ。現場がこの近くだったから寄っただけですって。見ましたよ、なんか大変みたいっすね。でも俺はタッチしないっすよ。会社通さない直接取引なんてバカのことでしょ」

無言で室伏を見つめる半沢。

室伏「なにを怯えてるんすか。ヤクザ殺したからですか？　こんな仕事どうせヤクザの下請けじゃないすか。知ってたでしょう」

半沢「……」

室伏「それとも死ぬのが怖いんすか？　半沢さんもしかして自分がまだ死んでないって思ってるんすか？　まだやり直せるとか」

ニヤけながら去って行く室伏。

室伏 「自分たち今日はもう上がりなんで。

お先に失礼しまーす、先輩」

田野辺兄弟 「お疲れさまでーす」

と、室伏が振り返って、

室伏 「あ、そうだ」

半沢に鍵を投げて寄越す。

室伏 「それ半沢さんの方の鍵だったでしょ。

なんかこつちも鍵が開かない現場があった
んで、間違ってたみたいっすね。その現場
スルーしちゃいましたけど」

取り残される半沢と田中。半沢は受け
取った鍵を力なく見つめながら、

半沢 「行くところは」

田中 「……」

半沢 「なら、安全な隠れ場所を知ってる」

○ネットカフェ・カップル向け個室

備え付けPCで映画を見ている半沢。

その横に座って半沢を見ている田中。

田中 「ここがですか」

半沢「そうだよ」

田中「ネットカフェじゃないですか」

半沢「仕事がなかった時はよく使ったなあ
間。」

田中「なんか飲み物とか持ってきてきます？」

半沢「ありがとう。じゃついでにジャンプの
一番新しいやつ持ってきて」

○同・店内

二人分のドリンクバーを注ぐ田中。

× × ×

漫画誌を何冊か棚から抜き出す田中

× × ×

週刊誌の棚の前――

写真週刊誌の表紙に浜口千波の告発

記事の見出しが載っている。

立ち止まってそれを見つめる田中。

○同・カップル向け個室の外々中

雑誌と飲み物を手にした田中がドアを

ノックする。

田中「田中です」

簡易錠の開く音。

少し間を置いて田中が中に入ると、

半沢がズボンのベルトを構えて部屋の隅から眼光鋭く入口を監視している。

半沢「なんだ田中くんか」

田中は黙って座り、ドリンクと漫画誌を半沢に渡そうとする。

やや間があつてから、半沢は構えを解いてジュースと漫画誌を受け取る。

田中「『ハンターハンター』、来週から連載

再開するみたいですよ」

半沢「本当？ やった。俺好きなんだ。田中くんは？」

田中「普通です」

半沢「そうなんだ」

漫画誌を読み始める半沢。

読みながらジュースを飲もうとして、

半沢は躊躇する。

田中はその光景をじっと眺めている。

田中「毒でも入ってると思ってます？ 自分がたかだか十万ぽっち欲しさに殺すって」

田中を見つめる半沢。田中はナイフを取り出して、半沢に向けながら、

田中「そんな回りくどい事しなくても、いつでも殺せますよ」

半沢はドリンクを飲んで、再び漫画誌に視線を落とす。

半沢「死にそうになるとみんな饒舌になる。

それともあいつが言ってたみたいに、もう死んでるからかな」

田中「(ナイフを弄びながら) 死んでるのは

俺やあんたじゃないですよ。千波さんだ。

千波さんを自殺に追い込んだパワハラ

野郎。その顔、どっかで見たことあると思っただ」

半沢「なんだバレちゃったのか」

田中「ネットにはなんでもあるから。それでこんな仕事をしてるんですか？」

田中「一人殺したら二人でも三人でも同じ
ですか？」

間。

半沢「俺が世の中のためになると思って、
罪滅ぼしのつもりで始めたって言ったら、

田中くんは信じるの？」

田中「そんなわけないじゃないですか」

半沢「俺にとってはそうなんだ。本当は金が
欲しかっただけだとしても、自分を納得
させるための建前が必要だったんだよ。

恵まれた人間も、恵まれてない人間も、
金を持つてるやつも、金を持ってない奴も
ルールは同じ。恨みを買ったら殺される。
法で裁かれることのない俺みたいな悪党に
も公正に裁きが下される」

田中「虐待児を殺すのが正義ですか」

半沢「(田中を見つめ) 田中くんは、どう
して来たの？」

間。

田中「単なる好奇心ですよ」

半沢「人がどうやって死ぬか見たかった？」

田中はナイフを引っ込めると、苛立ち混じりの苦笑を浮かべ、スマホをいじり始める。

田中「あんと一緒にしないでくださいよ」

半沢「でも田中くんは見てたんだよ。何人も殺されるところを見ていたし、警察に通報することだってできたんだ」

田中「できるわけないじゃないですか、人殺しに囲まれて。何言ってるんですか」

間。

部屋を出て行こうとする田中。

半沢「どこ行くの」

田中「もう帰ります」

半沢「外は危ないよ」

田中「危ないのはあんただけですよ。俺は誰も殺してない。それに朝になったらどうせみんな忘れてる。炎上と同じです」

半沢「忘れないさ」

田中「あんたのことはね」

田中は出て行く。

○ネットカフェ・ブース間の通路

スマホをいじりながら足早に個室から離れていく田中。と、座敷ブースのスイングドアから何者かの手が伸びてきて、田中を中に引きずり込む。鈍器で強く頭部を叩く音。

○同・受付

フリースペースのテレビで先ほどの黒塗りの暴走車の事故のニュースが、マンションの監視カメラ映像やコンシエルジュのスマホ動画などを交えてやっている。

店員の志村（35）と大谷（24）がカウンターの中に突っ立ってそれを眺めている。

大谷「こわー」

志村「こわいねー」

大谷 「なんなんですかね。最近こういうの
多くないですか。なんだっけ、前の……
てんかん？」

志村 「ああ、運転中にてんかん発作起こして
大事故になったやつ。あったねえ」

大谷 「なんなんだろうなあ」

志村 「俺もそういうのあったよ」

大谷 「人身事故？」

志村 「てんかん発作」

大谷 「志村さんてんかん持ちなんですか？」

カウンター内の監視モニターに視線を
移す志村。

志村 「いいや。でもその時はそう思った。言
ったっけ、俺プログラマーだったじゃん」

大谷 「初耳ですけど」

志村 「プログラマーだったんだよ、スマホ
アプリとかの。その会社ブラックでさあ」

大谷 「それ俺、知ってる会社ですか？」

志村 「たぶん知ってるよ」

大谷 「えー、どこだろう」

志村「大変だったんだよ。1日15時間くらいはパソコンの前にいたな」

大谷「死にますね」

志村「いや死ぬんだよ本当。そうやってたら急にさ、急にディスプレイ見ながら手が震えてきちゃって。えっ、って思ったらぎゅーって締め付けられるような頭痛が突然始まっちゃって、気持ち悪くてその場でキーボードにゲロ吐いちちゃって。倒れて、震え止まらなくて、喉が詰まるような感じがして、呼吸が苦しくなってきた」

大谷「こーわ」

志村「超こわかったよ。でそのときに、これてんかんだって思ったのね。どうも強い光がダメらしいから。それが土曜の深夜。スマホで救急車呼ぼうにもディスプレイを見るとまた発作が出る。その頃は何駅か歩けば救急病院があるところに住んでいたから、歩いて病院に行くことにしたわけ」

○マンションの廊下（回想・夜）

自室の扉にスプレーで落書きされた

〈人殺し〉の文字を半沢が見ている。

志村の声「妙な体験だったな。その途中に
歓楽街を通ったんだ。ネオンを見ると症状
が悪化するから避けたかったんだけど、
それが病院への近道だったから」

○マンションの部屋（回想・夜）

スマホの着信が止まらない。

ベッドに入っていた半沢は、それを

無視しようと頭から布団を被る。

志村の声「普段はそこを通ると必ずキャッチ
に狙われる。強引な立ちんぼに無理矢理に
腕を持ってかれたりするの、その日は誰
も俺に近づこうとしない。もしそいつらを
ありがたく思う時があるなら、その時だっ
たのに」

○電車内（回想・夜・移動中）

終電の車内で吊革に掴まったまま
半沢が寝ている。

スマホカメラのシャッター音。
目を覚まして振り返る半沢。車内は
混雑していて誰が犯人かわからない。

志村の声「病院の夜間診療窓口に着くと
他に待っているのは子どもを連れた母親が
一人だけだった。すぐに診察室に通され
てすぐに診察は終わった。医師に言い渡
された病名は偏頭痛。それだけだった」

○マンションの部屋（回想・夜）

電気を消した暗い部屋でパソコンを
見ている半沢。

S N S に電車内の半沢の隠し撮り写真
が住所や電話番号、〈拡散希望〉の
文字と共にアップされている。

志村の声「不安になったよ。それでももし
症状が悪化した場合はどうすればいいか
受付に聞くと、紙を一枚渡された。」

志村の声「知ってる？　なんていうのかな、
救急車が必要か簡易診断してくれるダイ
ヤル。その案内」

○道路工事現場（回想・昼）

警備をしている半沢を高校生たちが
スマホで写真に撮っている。
半沢はそれを見て、作業用のシャベル
を手に取ると彼らに近づいていく。
作業員が慌てて半沢に駆け寄って、
止めようとする。

志村の声「でも俺はスマホを見られないから
電話ができない。そう受付に告げると、彼
は入り口脇の公衆電話を指差した。馬鹿
だよな。俺は言われるまま救急病院の公衆
電話から簡易診断ダイヤルに電話をかけた
んだよ。馬鹿だ。渡す方も、かける方も」

○ネットカフェ・カップル向け個室

田中が置いていった週刊誌の浜口千波

特集を読んでいる半沢。

○オフィス（回想・昼）

涙を浮かべる震えて千波（25）。先輩の半沢が机や椅子を蹴ったりしながら、彼女を激しく叱責している。他の社員達は自分の仕事に手一杯で、誰も彼女を見ようとしなない。

志村の声「電話はナビダイヤルに繋がった。土日と平日の夜間は人がいないんだ。チャート式のナビダイヤルは、何度かけても、どの選択肢のボタンを押しても、救急車を呼んで下さいと繰り返すだけだった」

○ネットカフェ・カップル向け個室

土下座するように蹲っている半沢。

ドアをノックする音。

半沢は泣きながら顔を上げ、

半沢「田中くん？」

ドアの簡易錠を外す。

開けると、田中の持っていたナイフを手にしたマイが立っている。

半沢「来週から『ハンターハンター』が連載再開するんだよ。それまで待ってくれよ」

半沢に襲いかかるマイ。半沢はナイフを持ったその腕を掴んで、震えながらナイフを止める。

膠着状態の中で、マイは怒号と悲鳴の入り交じった叫びを上げる。

○同・店内

漫画を物色する客。

フリースペースでスマホを弄る客。

個室で抱き合ってキスしている客。

様々な人間がそこにいるが、響き渡る

マイの絶叫には誰も耳を貸さない。

ネットを見ていたブースの客が、叫びを遮断する為にヘッドホンをつける。

×

×

×

店内の俯瞰――

全てのブースにPCやスマホの光が
点っている。

志村の声「それからどこをどう歩いたのか
あまり記憶にない。いつの間にか知らない
住宅地に迷い込んだ。静かだったな。
多分無意識的に光を避けようとしたんだ」

○閑静な住宅街（回想・深夜）

志村が歩いている。街灯や戸建て住宅
の常夜灯、コンビニやマンション共用
部の電灯がまぶしい。

志村の声「でも結果は逆だったよ。外を歩く
人間の数が減れば減るほど、辺りの光の数
は多くなっていたんだ」

○ネットカフェ・カップル向け個室

半沢がマイの腕を壁に打ちつけ、マイ
はナイフを落とす。マイを突き放して
ナイフを拾おうとかがむ半沢。と、
突進してきたマイに押し倒される。

半沢の首を両手で絞めるマイ。半沢は片手でその手を離そうとしながら、片手でポケットに何かを探す。

志村の声「知ってる？ 安部公房の『燃えつきた地図』っていう小説。あの小説みただと思っただな。こんな一文があるんだ。『都会、閉ざされた無限。けっして迷うことのない迷路。すべての区画に、そっくり同じ番地がふられた、君だけの地図。だから君は、道を見失っても、迷うことはできないのだ』」

昔は小説家になりたかった。安部公房が好きだったんだよ」

○オフィスビルの屋上（深夜・回想）

ビルの欄干の向こうに立って、光に溢れた街を見下ろしている浜口千波。

光の海に溺れる、その孤独な背中。

やがて、彼女は音もなく飛び降りる。

○閑静な住宅街（回想・深夜）

豪華なゲートッド・コミュニティの門の前に来ているフードを被った志村。彼はその監視カメラを見つめている。

志村の声「どこに向かっているのかもわからないまま歩き続けて、ふと気が付いたことがあった。小学校の校門の前、一軒家の玄関、コンビニの犬走り、マンションのエントランス。どこを見ても監視カメラがこっちを見てる。どうやら光の量と監視カメラの数は比例するらしいんだ。でも何を撮ってるんだ。何の為に撮ってるんだ。あのカメラの向こうには誰がいるんだ」

フードを更に深く被って、カメラから顔を隠すように手をかざす志村。

× × ×
そのカメラから見た志村の映像。

× × ×
志村の手は透けて、その向こうに監視カメラが見えている。

志村の声「へ顔の前に手を広げてみた。手を透して街が見えた。振り返って見ても、やはり街は透き通っていた。街全体が生き生きと死んでいた。誰が生き延びられるのか、誰が生き延びるのか、僕はもう考えるのを止めることにした」
これも安部公房。『方舟さくら丸』だね」

○繁華街

俯きながら一人歩いている宇川。

○ネットカフェ・受付

漫画誌を読みながら志村の話聞き流している大谷。

カウンター内の監視カメラモニターで店内の様子を眺めている志村。

大谷「で、結局どうなったんすか」

志村「家に帰って寝てたら良くなった」

大谷「なんですかそれ」

志村「過労だったらしいよ」

大谷「へえ」

志村「それでその仕事は辞めて、今はこんなことしてゐるってわけ」

大谷が漫画誌のグラビアを見せる。

大谷「志村さん、これ超エロくないですか」

志村「(見て) エッロ！」

二人の前を全身血まみれの半沢が外に出ようとして通り過ぎる。

志村「あ、お客さん！」

声に立ち止まると、半沢は振り返って志村を見る。

志村「(にこやかに) すいません、お会計がまだお済みでないようなのですが」

○同・カップル向け個室

眼窩に深々とカギの突き刺さったマイの死体があおむけに倒れている。

○日が昇ろうとしている薄明の空

○ネットカフェの外（夜明け前）

ネットカフェから出てきた血まみれの半沢が人気のない繁華街を歩き出す。道の向こうから宇川がやってくる。

二人はすれ違ふ。

とくに何もなく歩き続ける二人。

と、半沢は急に踵を返して宇川に走って行ってドロップキックを食らわす。

半沢「おかしいだろうがぁ！」。

倒れた宇川に馬乗りになって、半沢はその胸ぐらを掴む。

半沢「血まみれの人間がいたら声をかけるとか警察に通報するとかすべきだろうが！」

宇川「な……え……?!」

混乱して言葉の出てこない宇川を殴りつける半沢。

半沢「なんでお前らは無関心なんだ！　なんでお前らは自分が良ければなんでもいいんだ！　なんでお前らは！」

宇川は必死に抵抗して、

宇川「だ、誰か！ 誰か！」

○ネットカフェ・受付（夜明け前）

志村が警察に電話中。

志村「はい料金未払いで帰っちゃいました。

はい、早く来てくださーい」

電話を切って傍らの大谷を見る。

志村「店で通報したことある？ 面白いよ。

深夜は警官いっぱい来るの。暇だから」

大谷「へえ、そうなんですか」

○店の前（夜明け前）

へろへろになりながら喧嘩をしている

半沢と宇川。

十人ほどの警官が駆け寄ってくる。

警官1「はい離れて！ 離れて下さい！」

警官2「ほら！ 離れろ！」

（画面暗転）

○年季の入ったラーメン屋（昼）

T…一ヶ月後

テレビでワイドショーをやっている。
テロップには「ネット殺人代行業者、
新たに三人逮捕」、映っているのは
室伏と田野辺兄弟の顔写真。

司会者「まあアプリを介した殺人の派遣業
といえますか、未だ被害の全容は明らか
になっていないわけですけども、小野さん
これ前代未聞ですね」

思想家「ヒューマンマイクの危険性は私も
以前から指摘してきましたけど、それが
最悪の形で現実になりましたね」

それをボーツと見ていた店員の甲斐を
ラーメン店長が小突く。

ラーメン店長「配達」

甲斐「あ、はい。じゃ、行ってきます！」

ラーメン店長「配達になると元気になる」

甲斐「前にそういうのやってたんで」

○拘置所・独居房（昼）

じつとして物思いに耽っている半沢。

看守の声「半沢、面会だ」

半沢「誰」

看守の声「母親と言ってる」

半沢「母親はとつくに死んだよ」

看守の声「お前の母親じゃない」

扉を見る半沢。

○コンビニ1・事務所（昼）

店長から給料袋を受け取る宇川。

店長「次の仕事決まった？」

宇川「まだです」

店長「なんだったらまたウチで働く？」

殺人鬼捕まえたヒーローが店員にいたら

さ、ウチとしても——」

宇川「嫌です」

○同・売り場（昼）

レジには店員のリンが（ホア）の名札を付けて立っている。

事務所から宇川が出てくる。店を出て

行こうとして、雑誌コーナーに寄る。
平積みになされた最新号の漫画雑誌を手
に取ると、リンのレジに持って行く。
会計しながら、

宇川「ハンターもう休載してる」

間。

宇川「仕事もう慣れた？」

リン「はい」

宇川「夜はダブルワークでしょ。大変ね」

リン「はい」

宇川「そういえばホアさんってどこの人？」

リン「ベトナムです」

宇川「ふうん。たまに帰ったりするの」

リン「今は帰れないです。そのための貯金は
全部使ってしまったから」

宇川「へえ、大変なんだ。じゃ、どうも」

会計が終わり、宇川は店の外へ。

リン「あの」

宇川は立ち止まって振り返る。

宇川「はい？」

リン「あ、ありがとうございます」

宇川「あ、はあ、どうも……（笑顔で）

お疲れ様です。頑張ってね」

リン「頑張って帰るよ」

宇川「俺も帰るよ。帰ってもっと良いところ探す」

笑顔を浮かべるリン。

それから宇川は店を出て行く。

○数年後の、リンの故郷での家族写真

（了）

【引用作品】

安部公房『燃え尽きた地図』

『方船さくら丸』